

「プロ」に勝つ

「プロ」に勝つ

[ベテラン必ずしもプロならず](#)
[“人間の輪”を仕事のベースに置く](#)
[天性のプロなどいない](#)
[“自称プロ”の傲慢さ](#)
[仕上げは横綱、見かけは大関](#)

セールスとは何か

[企業を左右する営業マン](#)
[何が販売成果を決めるか](#)
[やる気と販売成果](#)
[見込客づくり](#)
[訪問前の心構えと準備（1）](#)
[訪問前の心構えと準備（2）](#)

顧客をつかむためのコツ

[初回訪問の留意点](#)
[アプローチ時のマナー](#)
[アプローチに成功する話法](#)
[話題を豊富にしよう](#)
[相手の注意をひく販売資料](#)
[質問話法で相手をつかむ](#)

「プロ」に勝つ

ベテラン必ずしもプロならず

名南経営センター所長 佐藤澄男

皆さんの周りに、流れのままに惰性で仕事をしていたり、会社の機構や仲間の友情に甘えながら、楽しさだけを追い求めて毎日を過ごしている人はいませんか？

そしてそういう人はマンネリの海の中で、ただ慣れきった同じ仕事を繰り返しているのに過ぎないのに、自分こそプロだという顔をしており、また周りも「あの人はプロだ」と認めてしまっていないですか？

“人間の輪”を仕事のベースに置く

名南経営センター所長 佐藤澄男

みなさんの中に、「あの人は仕事ができる」「あの人がプロだ」「でも態度は傲慢で自分勝手だから、私は好きじゃない」という人はいませんか？

頭が切れる、仕事ができると自分で思っている人の中には、自分がみんなとは違う、自分がみんなを引っ張ってやっている、自分がみんなの食い扶ちを稼ぎ出してやっているのだから、みんなは自分に従うのは当たり前だという態度を平然と表したり、そうでなくても心の中でそう思っている人が多いものです。

誠に人間らしくて正直で、そういう人に私は少しも悪い感情を持ちません。しかしみなさん、仕事ができることとプロの仕事とは似ているようで、少し違うのです。私の周りの小さな世界でさえ、仕事ができるのにプロになれないまま、泣かず飛ばずの精気の無いただの中年になってしまった人たちが多くいます。

逆にそうした中でプロとなり、プロの仕事を見事に花開かせている人達も数多く知っています。その分かれ目は何なのでしょう？私の先輩で、経理畑からスタートし、遂に創業者から望まれて、ある中堅企業の社長に登り詰めた人がこう語ってくれました。

「経理からスタートし、色々なセクションを経験しましたが、一貫して私が抱いていて実行した信念は人を好きになること、人の痛みを感じることに、人のために何かしてあげることはないかといつも考えていること、そして人に好かれるよういつも心がけていることでした。

幼いときに亡くなった親父は水のみ百姓でしたが、常々『高い木の枝に自分で飛びつくんじゃないぞ。人様が肩車して下さるか、みこしを用意し、乗せて下さるまで待つんだぞ。』と言っておりました。私はその言葉を守ってきただけです。」

本物のプロになりプロの仕事をするには、ワンパターンの小さな世界から広い世界に打って出て、様々な経験を積みなければなりません。

天性のプロなどいない

名南経営センター所長 佐藤澄男

皆さんの周りに一人や二人、どんな困難な仕事でもさして努力をしている様子も無いのに、涼しい顔をしてスイスイこなしているプロはいませんか？

生まれつきの天才、根っからのプロなどと周りから褒め称えられながら、こういった人たちはへらへらと笑って多くを語らないものです。では、本当に生まれながらのビジネスの天才、労せずして他人の何倍もの仕事をやってのけられるプロというものは本当にいるものなのでしょうか？

実は私自身こうした天才はいると長い間信じていた一人だったのですが、私をそう思い込ませていた友人のある日の姿のお話をしてみましょう。

もう古い話ですが、この友人は今ではもう有名なコンピュータメーカーになってしまった外資系会社の、当時は機械式の大型会計機のトップセールスマンでした。プレイボーイで、彼の口癖は「俺は頭で商売する。頭の無いやつは汗を流せ。」でした。

ある日の日曜日、私は三重県のある町まで遊びに行くことになり、当時その方面をテリトリーにしていた彼の家に電話をしたところ、珍しく休日なのに仕事に出かけたとのこと。しかも行く先が私の遊びに行くすぐ近くの山の中と聞いて、私はひょっこり訪れて彼を驚かせてやろうと思い立ちました。

訪ね訪ねていった先は山奥の小さな農協で、取り入れの終わった一面の白菜畑の中にぽつんと小さな建物がありました。友人は木造の平屋の中で、当直の老人と二人で難しい顔をしてもくもくと帳面をめくっていました。

ストーブの火に赤く染まったそのまじめな顔は、これまで私が見たことが無かった別人のような顔で、からかうつもりだった私をしばし黙らせてしまう真剣なものでした。

その夜酒を酌み交わしながら打ち解けた友人の話は、日曜などめったに休んだことは無い、月に4000kmは山野を駆け巡る、帰宅は毎日0時を回るという凄まじいものでした。